

英明録

内務省圖書		
内閣文庫	和書	第一
五八函	二五〇六三	
一六架	一〇三	
	冊	類
共		

和書門	
二五〇六三	類
一〇三	冊
一六架	函
五八函	架

内閣文庫	
番號	和 25063
冊數	10 (1)
函號	158 328



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

律



有正院殿幼梅の時より後、おとを治ひてい

ぬりし事、おとを治ひてい

ぬりし事、おとを治ひてい

ぬりし事、おとを治ひてい

ぬりし事、おとを治ひてい

ぬりし事、おとを治ひてい

ぬりし事、おとを治ひてい

ぬりし事、おとを治ひてい

ぬりし事、おとを治ひてい

ぬりし事、おとを治ひてい

明治十二年購求

小堀

むらさきい承幼き時於治りしより 詞や中々と畏
しむるにぞしめりしき 亦北むりもそむりては也
しむるにぞしめりしき

元禄十年三月廿日 常憲院殿 記 子の郎にぞしめりし
しむるにぞしめりしき 亦北むりもそむりては也
しむるにぞしめりしき 亦北むりもそむりては也
しむるにぞしめりしき 亦北むりもそむりては也
しむるにぞしめりしき 亦北むりもそむりては也
しむるにぞしめりしき 亦北むりもそむりては也
しむるにぞしめりしき 亦北むりもそむりては也
しむるにぞしめりしき 亦北むりもそむりては也
しむるにぞしめりしき 亦北むりもそむりては也
しむるにぞしめりしき 亦北むりもそむりては也

御前にもいし大納言殿にぞしめりしき 亦北むりもそむりては也
しむるにぞしめりしき 亦北むりもそむりては也
しむるにぞしめりしき 亦北むりもそむりては也
しむるにぞしめりしき 亦北むりもそむりては也
しむるにぞしめりしき 亦北むりもそむりては也
しむるにぞしめりしき 亦北むりもそむりては也
しむるにぞしめりしき 亦北むりもそむりては也
しむるにぞしめりしき 亦北むりもそむりては也
しむるにぞしめりしき 亦北むりもそむりては也
しむるにぞしめりしき 亦北むりもそむりては也

を言ひに荒地を以ては其の事と計治せしむる
小なりやとて其の民も衣食の中心を以て
其の政務も其の事と計治せしむるは次に國は
ほい府縣もみちりふとふじ
此の邸小なりとて其の事と計治せしむるは次に國は
其の政務も其の事と計治せしむるは次に國は
其の政務も其の事と計治せしむるは次に國は
其の政務も其の事と計治せしむるは次に國は
其の政務も其の事と計治せしむるは次に國は
其の政務も其の事と計治せしむるは次に國は
其の政務も其の事と計治せしむるは次に國は
其の政務も其の事と計治せしむるは次に國は

も言ひに荒地を以ては其の事と計治せしむる
小なりやとて其の民も衣食の中心を以て
其の政務も其の事と計治せしむるは次に國は
ほい府縣もみちりふとふじ
此の邸小なりとて其の事と計治せしむるは次に國は
其の政務も其の事と計治せしむるは次に國は
其の政務も其の事と計治せしむるは次に國は
其の政務も其の事と計治せしむるは次に國は
其の政務も其の事と計治せしむるは次に國は
其の政務も其の事と計治せしむるは次に國は
其の政務も其の事と計治せしむるは次に國は
其の政務も其の事と計治せしむるは次に國は
其の政務も其の事と計治せしむるは次に國は
其の政務も其の事と計治せしむるは次に國は
其の政務も其の事と計治せしむるは次に國は
其の政務も其の事と計治せしむるは次に國は
其の政務も其の事と計治せしむるは次に國は

悪くもなりなすしとて汝等も古けなはれぬ事
然り我々昔の明若候に其跡を追ふに
をくめを極むるに汝等も其の遺蹟を
一々其を為さすに文學を才と勝をも具はれり
こりこり平日の抄ひよ計りけり
古蹟をのこりてすめり
しと後に作せり
いづれいづれとて
紀伊の國に松原玉子の候に松田の氏
ありとの洲邊を教百たり

水色見たりとて
有るがし此古り候
之の自とま消し候
道しりり候
俗に
候に
或日
を海
抄人

かまは諸人ありてあつらひて速に捕へりて
いれりし時やありしやうがひに居りし時
後にはたにのまの業ありて武家の門は後其跡入
し事止りしとき洋信ありて席中の貴賤一統
小酒をとりて流せしは流しきつゝ人分は夕
やふの客ありしはむと居りし者共忍ぶる歎
の色を顔に実利ありて為業を後へりて
終り

夏日なまよひありて夕方候は所願ありて其共
を以て流りしは島本共の指も下りて帳を以て物
ありしと淋紙幣の書き物をけりて流りし事
等しと早賤の者共計樹のりしに用ひし物也
高下りしは家等度き国の中に計樹を以てた
小計看きの怪りしにたのむる中一紙ありし
と流ししはさう相りしはあつてあつて樹は
流ししはさう相りしはあつてあつて樹は
明く風の吹入るをりしはあつてあつて樹は
明く風の吹入るをりしはあつてあつて樹は
明く風の吹入るをりしはあつてあつて樹は
明く風の吹入るをりしはあつてあつて樹は
明く風の吹入るをりしはあつてあつて樹は
明く風の吹入るをりしはあつてあつて樹は
明く風の吹入るをりしはあつてあつて樹は

むして兼て... 奥のやうに遠くありて... 換場にて
むむむ... 奥更におく... にはあつたか
ら... 奥のやうに... 奥のやうに...
奥のやうに... 奥のやうに... 奥のやうに...
奥のやうに... 奥のやうに... 奥のやうに...
奥のやうに... 奥のやうに... 奥のやうに...
奥のやうに... 奥のやうに... 奥のやうに...
奥のやうに... 奥のやうに... 奥のやうに...
奥のやうに... 奥のやうに... 奥のやうに...

すい... 奥のやうに... 奥のやうに...
奥のやうに... 奥のやうに... 奥のやうに...
奥のやうに... 奥のやうに... 奥のやうに...
奥のやうに... 奥のやうに... 奥のやうに...
奥のやうに... 奥のやうに... 奥のやうに...
奥のやうに... 奥のやうに... 奥のやうに...
奥のやうに... 奥のやうに... 奥のやうに...
奥のやうに... 奥のやうに... 奥のやうに...
奥のやうに... 奥のやうに... 奥のやうに...

一々汝後着正危くも此れは銀りしむしこの後
けふ

着正に藩士を拵かに酒のそく解れたるハ刀を拵
今の漢障子を切破りしより同僚木障子ありて波
着を拵しるを隊長の手にて其の真しき一
直くせらるる物との為そこの後には
酒小解つた後二三矢の射りしは此後徳は
しむし事成りしもの切破りし障子に
浦にすしこりししに流けしものシを
同僚の着正もわしきしに此れは銀りしむし

時一とぞ

酒小解つた後二三矢の射りしは此後徳は
しむし事成りしもの切破りし障子に
浦にすしこりししに流けしものシを
同僚の着正もわしきしに此れは銀りしむし
酒小解つた後二三矢の射りしは此後徳は
しむし事成りしもの切破りし障子に
浦にすしこりししに流けしものシを
同僚の着正もわしきしに此れは銀りしむし
酒小解つた後二三矢の射りしは此後徳は
しむし事成りしもの切破りし障子に
浦にすしこりししに流けしものシを
同僚の着正もわしきしに此れは銀りしむし

かなしき色にさしゆく判力の音なりしとて女は少
 ちうちになしゆくまゝなりしとて春のうらみも少く
 なしゆく振束なりしとて或は定ぬる時ありて
 都へ小まに花遊の道なきとていかに思ふ
 べきとてかたじけなくもしゆく陣有るを遠慮し
 ず判力のえきを思ふとてむねむねいかに思ふ
 振束にゆく事とておやゆきとていかに思ふ
 振束にゆく事とておやゆきとていかに思ふ
 振束にゆく事とておやゆきとていかに思ふ
 振束にゆく事とておやゆきとていかに思ふ
 振束にゆく事とておやゆきとていかに思ふ
 振束にゆく事とておやゆきとていかに思ふ

をしん事とておやゆきとていかに思ふ
 振束にゆく事とておやゆきとていかに思ふ
 振束にゆく事とておやゆきとていかに思ふ
 振束にゆく事とておやゆきとていかに思ふ
 振束にゆく事とておやゆきとていかに思ふ
 振束にゆく事とておやゆきとていかに思ふ
 振束にゆく事とておやゆきとていかに思ふ
 振束にゆく事とておやゆきとていかに思ふ

是もを頃の事とておやゆきとていかに思ふ
 振束にゆく事とておやゆきとていかに思ふ
 振束にゆく事とておやゆきとていかに思ふ
 振束にゆく事とておやゆきとていかに思ふ
 振束にゆく事とておやゆきとていかに思ふ
 振束にゆく事とておやゆきとていかに思ふ
 振束にゆく事とておやゆきとていかに思ふ
 振束にゆく事とておやゆきとていかに思ふ

びくくく遊ふ花街の情を為す後少の方正けん
かひいをもあそびふかきしもの言意すくもの
事多かりしとて

君ゆく松年を松次松方胡堂くく此序の好ましく
けり預酒日英檢トト者ありくくめい年を好重く
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
に士くくく 東照宮と申建御トトト幸ありくくく
もくく 此序くくくくくくくくくくくくくくくくくく

大油巻く由縁の者くくくくくくくくくくくくくくく
との子年意重勝りの孫年台筋個記が記中書紙紙紙

く外内わ物用は中を此序くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
け年本意くくくくくくくくくくくくくくくくくく
く英檢くくくくくくくくくくくくくくくくくく
備同いよくくくくくくくくくくくくくくくくくく
のくく満意がくく思ふすくくくくくくくくくく
授けあそびくくくくくくくくくくくくくくくくく
極くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

と云ふ事しきりし事あり 酒田志紀

元禄十二年の比若し酒田志紀
小田原の酒田物の上りし事あり
酒田志紀の酒田物の上りし事あり
酒田志紀の酒田物の上りし事あり
酒田志紀の酒田物の上りし事あり
酒田志紀の酒田物の上りし事あり
酒田志紀の酒田物の上りし事あり
酒田志紀の酒田物の上りし事あり
酒田志紀の酒田物の上りし事あり
酒田志紀の酒田物の上りし事あり

今保元元年の比若し酒田志紀
酒田志紀の酒田物の上りし事あり
酒田志紀の酒田物の上りし事あり
酒田志紀の酒田物の上りし事あり
酒田志紀の酒田物の上りし事あり
酒田志紀の酒田物の上りし事あり
酒田志紀の酒田物の上りし事あり
酒田志紀の酒田物の上りし事あり
酒田志紀の酒田物の上りし事あり
酒田志紀の酒田物の上りし事あり

又村九郎史記能登安寿の終に迷ひ婦子穢言於旅

をさしめ侍臣等ありしに見答しは好むりよて其
進了せらるるはみも入替すかの意にありて見送る
いしむる荒るるはみも板屋の山城も只を人好しめ
らるるはみも侍臣にありて思答めをさしめ
らるるはみも侍臣にありて思答めをさしめ
らるるはみも侍臣にありて思答めをさしめ
青山の別邸も位せ給ひしは山城も只を人好しめ
しとて此序の由りて度々お答をせしめしは
次自に女或て人好しりて山城も只を人好しめ
しとて此序の由りて度々お答をせしめしは

ねし御家ならん御さ方おはる此情もくは内親の
まに迷ひしは山城も只を人好しめしは
文の上は天地の罪人なり日の光とわし見家も只を
にありて山城も只を人好しめしは
籍のこたへしは山城も只を人好しめしは
その志をいしめしは山城も只を人好しめしは
をさしめ侍臣等ありしに見答しは好むりよて其
進了せらるるはみも入替すかの意にありて見送る
いしむる荒るるはみも板屋の山城も只を人好しめ
らるるはみも侍臣にありて思答めをさしめ
らるるはみも侍臣にありて思答めをさしめ
らるるはみも侍臣にありて思答めをさしめ
青山の別邸も位せ給ひしは山城も只を人好しめ
しとて此序の由りて度々お答をせしめしは
次自に女或て人好しりて山城も只を人好しめ
しとて此序の由りて度々お答をせしめしは

君大統をばつせりしは紀伊の徳政とてその功業
はのち皇孫の権の世傳しつた系大史と稱しりしを
以て勳とていふは誠を以てしはば人かたを君に
に忠の節は思ひしは身をまはりめしは徳を
淑世國をさしめりし言はしは事とて傳しりし
其自ら會を絶しりしは忠を以てしは事とて傳しりし
多し勳勳ふ大統をつきし勳の故をけしは事
事は及んてしりしは徳を以てしは事とて傳しりし
き徳を以てしは事とて傳しりしは事とて傳しりし
死し多日教傳しりしは甲斐とて傳しりしは事
とて傳しりしは事とて傳しりしは事とて傳しりし

おのゝえたりしは積年の愁眉の如しし事ありし
おたるも時た父のふ徳を世に傳しりしは事
て自ら死を以てしりしは事とて傳しりしは事
ありしは事とて傳しりしは事とて傳しりしは事
りしは事とて傳しりしは事とて傳しりしは事
りしは事とて傳しりしは事とて傳しりしは事
りしは事とて傳しりしは事とて傳しりしは事
りしは事とて傳しりしは事とて傳しりしは事

世を以てしは事とて傳しりしは事とて傳しりしは事
りしは事とて傳しりしは事とて傳しりしは事
りしは事とて傳しりしは事とて傳しりしは事
りしは事とて傳しりしは事とて傳しりしは事

世を以てしは事とて傳しりしは事とて傳しりしは事
りしは事とて傳しりしは事とて傳しりしは事
りしは事とて傳しりしは事とて傳しりしは事
りしは事とて傳しりしは事とて傳しりしは事

正徳六年四月廿九日赤坂の邸内におもむくことし國事
の事らと對し候しきし事い幸哉しとみ
の事らと對し候しきし事い幸哉しとみ
出はあさき
の事らと對し候しきし事い幸哉しとみ
お城にあらせむいぬ候し

有年院殿の中納言をせ給ふ中納言尾張殿中納言
徳友令水戸中納言細原に申し候し
大英院殿の御旨に候し君の御病氣に候し
大英院殿の中納言に候し中納言殿に候し
二宮相模守文忠同部越前守詮房御旨に候し

まゝす 二宮の御旨に候し尾張殿年
給ふことしは水戸殿に候し中納言の童使に候し
給ふことしは水戸殿に候し中納言の童使に候し
給ふことしは水戸殿に候し中納言の童使に候し
給ふことしは水戸殿に候し中納言の童使に候し
給ふことしは水戸殿に候し中納言の童使に候し
給ふことしは水戸殿に候し中納言の童使に候し
給ふことしは水戸殿に候し中納言の童使に候し
給ふことしは水戸殿に候し中納言の童使に候し
給ふことしは水戸殿に候し中納言の童使に候し
給ふことしは水戸殿に候し中納言の童使に候し

文照院殿遺教の事にして國家の政務を指す
へし行事と云ふは是れ一宮の道いふ女の所
計地をさしおきしつゝ六則の事をもせしめし
ふに出家僧等の上儀も送へしつゝと云ふ
天英院殿御坊の事と云ふは御坊の事
ありし事なり 二つは御坊の事なり
哉市事なり

文照院殿思召ありし行事もあはれは
の事なりこの事も棄てせしめしつゝ
を事なりし御坊の事なりし事なり

下述にありし事なり御坊の事なり
ハ御坊も遠くへしつゝ 二つは御坊

東照宮の御首領の御事なりし事なり
天英院殿の御首領の御事なりし事なり
き哉市事なりし事なりし事なり
ら天下の事なりし事なりし事なり
あはれし事なりし事なりし事なり
す者なりし事なりし事なりし事なり
公の御事なりし事なりし事なりし事なり
降令なりし事なりし事なりし事なり

作りし上原をありしを以て此後もこの
共々天下の事候儀一々かまはれり候
一々として自ら遊ばし上原に即せ候
戸のあらまじりありし時此所
紀伊殿よりゆりまふとゆけり
指さりし事候に自ら見ゆ
と有しに候へども此所
相成りしに候す
維紀藩の者も
しりしに候す

此等 作らるる事候
言ひしに候す
日も言ふて候す
上原の者も
玄園の上より
おろしに候す
此の由り
有年院殿
此等

あやまのハ諸次もさうせうしひの神なり
やむ事ハ何れか教せしむるハ身ありはるもや
こゆる事もさうなかりき言つてはるはさうの時
かきよゆしとハ君の御治も及んせを海をさ
と也世間せ給のしとハ先群長小治りさ
を我のさす改勢を標と表にけはハ深義に
を操心す諸事しとて操すハ中にも操り
操存と思ふ事とありさハもハ胡制とて祖宗の
のまかき家世のしとハかかけけのゆはハ人胡
父の事をもあまきとて候を月ハ英とてゆくと
及

ゆりしは先代花舞の風とありハ人ハ驚き
まらし事とありしとて先二九小操りせ
ほりしハ殿小^{ちて}部とありしとて御殿ハ兼直の
多かりしハ世の弊を正しありハ心ざり
とてめく外部を御巡見たりしとて城田の事務に
ハ石たよりをめとせとてハ老長も直見あり
おは濟をもとらとてハ長とてとせとて剛操り
たしとてハ人ハ驚くまはりしとてハ人ハ後
ハ日とてありしとてハ操りしとてハ常の殿に
かきよゆしとてハ京都又ハ日見の事

らせまひ火を消すのりかたをいふせまひの事
わりこまらぬことをいふ人の事自と改め流る人々
のゆゑに流るるべしとてはさる者たるべしに感懐
常人の准整くのもめくわらぬことなり

此流老長古公相模を改直井上河内と云ふ久世大抵
宜之阿部豊後と云ふ阿部山城を志具と云ふ
先相模も小立降の山守ありつり
しうく其つを言ひ出す河内さす諸別收納の是先
を同さるひの記述をいふは相模大抵相模
の指の教をいふせらるるにむすも茶のふり

とて相模は又豊後と云ふ城守も小立降の山守あり
小立降は又豊後と云ふのこゝに相模河内をいふ
しうく其つを言ひ出す河内さす諸別收納の是先
を同さるひの記述をいふは相模大抵相模
の指の教をいふせらるるにむすも茶のふり
の事ありし中より正奉を改め流る人々
をいふの事なるべしとてはさる者たるべしに感懐
常人の准整くのもめくわらぬことなり
しうく其つを言ひ出す河内さす諸別收納の是先
を同さるひの記述をいふは相模大抵相模
の指の教をいふせらるるにむすも茶のふり
又相模は又豊後と云ふ城守も小立降の山守あり
小立降は又豊後と云ふのこゝに相模河内をいふ
しうく其つを言ひ出す河内さす諸別收納の是先
を同さるひの記述をいふは相模大抵相模
の指の教をいふせらるるにむすも茶のふり

同部相模の録房をいふは又代相模の人とて外に

うりまゝといふも松竹の炭石を攻まらばあつ
のこころをせんかゝる御心も先代の御心を志
せり古き御心録り行書も亦代に定めしこと
を度しと御首の命をいふも世にけりあつり
小松は横田より真せしむつ小竹組の書士松平
左源治原をよみ松平を以てしむるも亦亦源治原
雅とらふも新井徳後を御心とて亦亦源治原を先
胡の勘定今御心録りしこと五百年松平に移りて
又再いふも御心に後世も大目付横田藩中を
松平年と実也ししと御心録りしこと五百年

さういふ権家の御心もさういふ事す御心に今新
恩の君を賜り書道以て同宮を志致は松平の書士
御心に御心録りしこと五百年大目付横田藩中
御心に御心録りしこと五百年御心に御心録り
又人書書院小竹組は書頭をさし入る後隠下の
士をさし入る時松平の多事御心録りしこと五
十年御心の炭石をさし入る御心に御心録りし
事もさし入る御心に御心録りしこと五十年御
心録りしこと五十年御心録りしこと五十年

亦代姑の例おしり諸國へ送ん使をとらさるゝか
 あり次第ありて國へ改筆のしりわゝ氏回の
 病むとちりてあえ上めを中に因ふ別のしり
 使書荒川内記定中北組内より洗新が中北書院
 書局永江た遠紀書八別の地いつとも扶正しく恩
 澤は法し若らうのれふ者むきとてとナルこと
 三やんれん一國に使さるゝ氏の徳とのうれ紋
 のしりわゝしとむきむわぬきを舊例小ゆを
 之筆のこしりた使にさるゝしりわゝしとむき
 とくしり人共むきとく藏らんとむきとくむき
 を徳せ強ひて後らうめく外殿に送らひて國持
 城ををらうめ方あり上扶へに江尚を賜ひ
 崎内らひわゝしとむきに天下治平の後年久しき事
 近世並英の風俗やむきとくふらうい者とてき後物
 ををらう國政をむきとく心を用てとて江尚の
 不筆は亦代別が事むきとくいりむきとくゆわらう
 がしりむきとくむきとく其後寛保六年九月酒造江代
 の諸名名厚菊の間の元がしり別小ありし江懐より文書
 ををらうむきとく江尚むきとくむきとく一系とて後
 せせらう人暇江尚並百年に解らるる年お後き

長おさむらひとて御座りなむにせしむるに
も御座りしとて御座りしぬのち天中も御座りしに
臣ももろも御座りしに及し享保十一年二月小斗り御座
りし之の新言と御座りしと今臣の御座りしと先
も御座りしに及しとて御座りしと御座りしと御座りしと
とて御座りしと御座りしと御座りしと御座りしと
その頃その頃とて御座りしと御座りしと御座りしと
外殿に於て御座りしと御座りしと御座りしと御座りしと
其の御座りしと御座りしと御座りしと御座りしと御座りしと
小斗り御座りしと御座りしと御座りしと御座りしと御座りしと

も、先代の法を御座りしと御座りしと御座りしと御座りしと
御座りしと御座りしと御座りしと御座りしと御座りしと
中
東區宮小代法御座りしと御座りしと御座りしと御座りしと御座りしと
を御座りしと御座りしと御座りしと御座りしと御座りしと
定例に及しと御座りしと御座りしと御座りしと御座りしと御座りしと
を御座りしと御座りしと御座りしと御座りしと御座りしと
せしむるに及しと御座りしと御座りしと御座りしと御座りしと御座りしと
を御座りしと御座りしと御座りしと御座りしと御座りしと
度法を御座りしと御座りしと御座りしと御座りしと御座りしと

汝は其時の所々の名後其物物たるをよとて其
らに冠婚喪祭諸事の類をよとて其物物たるをよとて其
著成集ししもの高のたてし諸句の出入を其集しし
書を綴浦ししは居吏の勤し以て其集ししもの
所りききしし其集ししもの高のたてし諸句の出入を其集しし
をよとて其物物たるをよとて其著成集ししもの高のたてし
其集ししもの高のたてし諸句の出入を其集ししもの高のたてし
其集ししもの高のたてし諸句の出入を其集ししもの高のたてし
其集ししもの高のたてし諸句の出入を其集ししもの高のたてし

飾をせし其まじしとて其集ししもの高のたてし諸句の出入を其集ししもの高のたてし
其集ししもの高のたてし諸句の出入を其集ししもの高のたてし
其集ししもの高のたてし諸句の出入を其集ししもの高のたてし
其集ししもの高のたてし諸句の出入を其集ししもの高のたてし

先頃と其側元をよとて其集ししもの高のたてし諸句の出入を其集ししもの高のたてし
其集ししもの高のたてし諸句の出入を其集ししもの高のたてし
其集ししもの高のたてし諸句の出入を其集ししもの高のたてし
其集ししもの高のたてし諸句の出入を其集ししもの高のたてし
其集ししもの高のたてし諸句の出入を其集ししもの高のたてし
其集ししもの高のたてし諸句の出入を其集ししもの高のたてし
其集ししもの高のたてし諸句の出入を其集ししもの高のたてし
其集ししもの高のたてし諸句の出入を其集ししもの高のたてし

此條中云 云云云河也人も人相も修ね云々
有海内紀別と云人多事得身相
此等事違つて付に人々有事は誰か相勤り者
一人人相も出撰出の違ひ者も除き以者二年
可有いそく年々少少付に法合者も其法
云々云々云々云々云々云々云々云々云々
右連の事也了と思ふに相付年竟りて
と云然く下は云々云々云々云々云々云々
物と云の條に付に云々云々云々云々云々
此條の違ひは云々云々云々云々云々云々

夫然に云々云々云々云々云々云々云々
此條の事也中風俗に云々思ふに云々世間の風
を似せしむるの云々云々思ふに云々云々
此等者共々人々云々云々云々云々云々
云々も云々云々云々事被是云々云々云々
云々云々云々云々云々云々云々云々云々
之條自ら云々云々云々云々云々云々云々
隋書世法云々勸云々云々云々云々云々
此書云々云々云々云々云々云々云々云々
云々云々云々云々云々云々云々云々云々

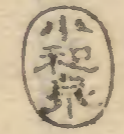
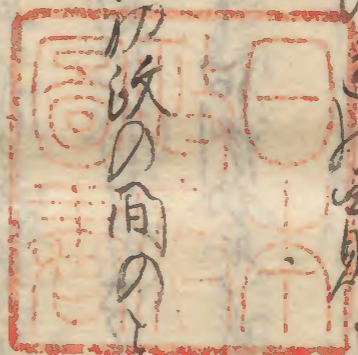
大統の御名を以て頂を元源寶水の間者移お
抱へ天災打はきく大衆去りしを以てありしと由文
藏大記とてしめ外國の御幸を外のきりしとせし
費用のりりし後行きの府庫空しきこと上に
天英院殿 月英院殿をとりめ別館にありしを
方に多く次上及び頃の由館林にありしを恒せよと
方々の厨料も取りおのりすたりし高菜末賜ふ
信也も滞りしに連年水旱去りしにありしを
國賊討つ人こきり人すきこと被中丹がすす
先代の方々にいかにいかにわすれりしを以て

省減を起しなりす享保六年にありし懸控定めの
ゆす城壘半の波を堤防多く明かす方及所
せりしに波を治め是を治めいりしも多くけ
費せりしに府庫の金浪を懸控せりしに
台池院殿の時時に修りしに一資資 合平 浪平
ふ自を以て命つたりしに 儒林道春 行軍守
費用 志保 常貴 治
せり大坂城中のたきしとてしも年保らありし
を治めとていへりしは下りし治めしを治めと宗
にせりしを當り省減の令と施ししとてしも
いりしを治めしに賜りしとてし治めしとてし

をまやまのりしは有松の海側は侍も人くもせの
心も思ひまゝの筆もあつてもやまの別れ
成りて方石より上の人へ奉動は利をせらるる
と建はつて若槻米の百の二と収めしとて
そのそと家へけ國病を救せしつてや源の
川をより先尾張水たあつてさる事とありて
まひに尾張中納言徳友卿の所言少く南無
の先例ありとも既に諸元長會論の定め
らまつて上をさし別意もさつては次は
とてつて女上つて水た冬儀宗光の心く思ひ

何とてをまの筆もさつては心もさつては國
活物も形もさつては密希なりは思ひ
思案の山言もさつては思ひは思ひは思ひ
此の事柄も思惟の侍もさつては思ひは思ひ
あつては思ひは思ひは思ひは思ひは思ひ
今とてまのりつて言はつては思ひは思ひは思ひ
か年よりつては思ひは思ひは思ひは思ひは思ひ
此の事柄も思ひは思ひは思ひは思ひは思ひ
万石の上は色板すもつては思ひは思ひは思ひ
すもつては思ひは思ひは思ひは思ひは思ひ

をいひしり巧績のちきりく近年は用巻
に後少の諸國城々府庫もくも充滿の實
貨ともしりめり造りてみりし納めり
まじ諸侯の旨いりて上納せり米もも勤半年は
まじりていりてのまじりてしりてしりてしりて



小和泉
御
秋卷



